

〈書評〉

Michel Butor, *Improvisations sur Balzac*.

T.I. *Le Marchand et le Génie*

T.II. *Paris à Vol d'Archange*

T.III. *Scènes de la Vie Féminine*

Éditions de la Différence, coll. « Les Essais », 1998.

松 村 博 史

今年、一九九九年はバルザックの生誕二百周年に当たる。本国フランスではソルボンヌ大学の主催で五日間にわたるコロークが行われ、秋にはバルザックの生誕地であるトゥールでも別の大きな研究会が予定されている。また日本でも春の学会に合わせて記念研究会が催されたほか、分科会でも多くの研究発表が行われ、特別講演では作家の大江健三郎氏が『村の司祭』について語ったりした。一方、出版の分野においても、既に去年から様々な研究書から紹介の本に至るまで、ただでさえ多いバルザック関係の新刊書が、普段に倍増する勢いを見せている。日本におけるバルザックについての出版企画の最も大きなものとしては、藤原書店より今年から来年にかけて刊行される『「人間喜劇」セレクション』全十三巻があげられよう。また春の研究会や学会の分科会での発表を含む日本のバルザック研究の成果は、記念論文集にまとめられ、今年中に出される予定である。このような新刊書ラッシュは、これからもしばらくの間ピークが続くことが予想される。

以上のようなさまざまな催しが、ある種の読者に対して、しばらく手にしていなかったこの小説家の作品を、久しぶりに繙いてみようという気にさせるとすれば、それは意義のあることと言わなければならない。しかしながら、こういう華やかなお祭り騒ぎが、バルザックの読者層の一定の拡大という形で定着するかどうかということになると、問題はもう少し複雑になる。もちろん大きなことはできないにしても、その点で少しでも成果を上げるためには、今日においてバルザックを読むということの意味を問い直すという、さらに困難な、辛抱強い作業が必要となってくるだろう。そのような試みにおいて、ささやかながら着実な貢献を示すものとして、今回は去年の秋に出たミシェル・ビュトールの三巻からなるバルザック論を取り上げたい。評者はビュトールの創作活動についても、また現代の文学理論についてもものを言える立場にはないが、一人のバルザック研究を専門とする人間として、いわゆる研究書とは一線を隔てるこのバルザック論について何が言えるのかを探ってみたいと思う。

このビュトールの新しい評論集はまず三巻という量の多さに圧倒されるが、これは彼がジュネーヴ大学で行った一連のバルザックに関する講義を採録したものである。書物という形態に合わせてさまざまな書き換えを行っているとはいうものの、講義という話し言葉の活気と平明さをそのまま保った文体となっている。全体には『バルザックについての即興』という総題が冠され、

『人間喜劇』の中の『哲学研究』の小説群を扱った第一巻『商人と天才』は一九七九-八十年、バルザックにおけるパリのイメージを扱った第二巻『大天使の見たパリ』は一九八六-八七年、さまざまな女性像を分析した第三巻『女性生活情景』は一九八九-九十年の講義をまとめたものである。ビュトールはこれ以前にもフローベール、ランボー、アンリ・ミショー、そしてビュトール自身についての『即興』集を出版しているが、今回のバルザック論はその延長上にあり、かつ最大のものだ。また同時に、八十年代の全体にまたがるこれらの講義は、六十年代の『レペルトワール』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの中に含まれるバルザックについての論文と二十年の隔たりを置いて呼応するものと言える。全体的に見れば、六十年代の論文で言われている内容は今回のバルザック論に吸収され、発展させられることになったと考えていいと思う。

バルザックの作品は何よりもまず読まれることを要求している。『ゴリオ爺さん』や『谷間の百合』などの代表作を読んでいる人は多いだろうが、大部分の読者はそこで止まってしまうのではないだろうか。しかしバルザックは『人間喜劇』を全体として読まれるものとして構想し、実際読者はこの小説群の全ての作品を読むように求められているのである。そして作者は、これを全て読めば、十九世紀のフランス社会の仕組が理解できるようになると考える。これは一見途方もないことに思えるが、バルザックという作家を考えるとときには本質的なことだ。バルザック自身、『ふくろう党』を発表してから、その死に至るまで、『人間喜劇』を書くのに二十年を費やしており、にもかかわらずこの作品は決定的に未完成な形で残ることとなった。一人の読者がこれを読もうとすると、たとえフランス語を母国語とする人間であっても数年はかかるだろう。二十世紀も終わろうとするこの時代に、『人間喜劇』の全体を読むという、向こうみずな企てに取り組むことに果して意味があるのだろうか。

ビュトールのバルザック論は、まさにそこから話を進めていく。三巻の冒頭には「全体の方向付け」なる一章が設けられ、そこでは『人間喜劇』の全体が『風俗研究』『哲学的研究』『分析的研究』からなっていること、そして最初の『風俗研究』はさらにいくつかの『情景』からなることが説明されるのである。さらに作者はこの「研究」*études*の語が音楽の「練習曲」の意味合いもあるとし、それぞれの「研究」は同時に物を見るための訓練にもなっているのだと言う。著者は確か、『レペルトワール』のバルザック論においても、『人間喜劇』全体の構成について分析を加えていた。このような議論は、ともすれば表面的な紹介文ととられかねないが、ビュトールの意図するところは明らかである。彼は、バルザックの作品の代用品となろうとする多くの評論とは逆の方向をとり、バルザックの作品自体を読むという困難な作業に読者を誘おうとしているのだ。

上に述べた冒頭の章に次ぐ、『あら皮』を扱った章で、彼は『人間喜劇』を読むという行為に関して、非常に示唆的なことを述べている。『あら皮』は、知られているとおり、主人公が骨董屋で手に入れた皮の断片が、彼の願いを叶えるにつれて次第に小さくなってゆき、それが消滅するときに、その持ち主も死ぬという話である。この皮は人生の比喩であるということが、これまでに多くの評者によって指摘されてきたが、ビュトールによれば、あら皮とは本の表紙に使われるものであり、この皮は同時に本の比喩にもなっているのである。「全ての本はあら皮である」

と彼は言う。「本を消費すると言うこと、読むべき残りのページ数がどうしようもなく減っていくというこの事実は、われわれの人生の枠の中で終わらせることの出来る全てのこと、そして人生をいかにやりくりするかというわれわれの抱える問題のイメージである」(I, p.28)と。〔以下、ビュトールの引用については、上記の通り巻数とページ数のみを示す。〕そして『人間喜劇』に言及して、こう言っている。

バルザックの作品は貪欲である。というのも、それはわれわれが他の作家の作品を読むのを妨げてしまう。バルザックは確かに、その全てを読まなければならない。しかし現在プレイヤード叢書の分厚い十二巻を占めている『人間喜劇』を見れば、あるいはためらいを感じるかも知れない。あるいは、人生のこれほど多くの時間をそれに費やすだけの価値が本当にあるのか、と自問したくなるであろう。バルザック自身にとっては、その答は明白である。彼なら次のように言うだろう。その通り、私が書いた物を読むために他の何人かの作家の本を読まずにすませる、そういう手間を払うだけの価値は充分にある。なぜなら、私が書いた物が他の本のかわりをするだろうから。(I, pp.28-29)

そしてビュトール自身にとっても、その答は明白なのである。

このバルザック論を読むと、まずその引用文の多さに驚くかも知れない。この本を読む人は、相当の量のバルザックのテキストを、否応なしに同時に読まされることになるだろう。これらの引用にはプレイヤード版のページ数さえついていないが、それについてビュトールは、三巻の最後に「数多くの引用の後ろに出来る限り私の身を隠すことが必要不可欠であった」(III, p.240)と述べているのである。このように圧倒的なバルザックの引用の量に対して、当時の資料からの引用も、バルザックの他の研究書からの引用も全くないのは、バルザックのテキストを読むという作業に集中するビュトールの徹底性を証明するものだ。ここで小説家は、研究者とは距離を置き、最初から最後まで一人のバルザックの読者という立場に徹している。そして彼がバルザックのテキストを読み解くにあたって使うのは、良識ある読者の判断力だけである。恐らく現代フランスにおける最良の読者の一人であるビュトールの読みをたどるならば、過不足なく読む、すなわち、読み落としもせず、深読みしすぎもせず、テキストを読むとはどういうことかについて、教わる場所は多いであろう。

数多くの引用に対してコメントを加えるという形式は、当然この著作が講義録に基づいているということにもよるが、同時に評論自体のスタイルに対する鋭い意識をも含んでいる。ここで作者は、何も新しい学説を正当化しようとするのではなく、テキストを読み込むうちに自然に明らかになってくるさまざまな筋を、くっきりと浮かび上がらせようとするのである。タイトルの「即興」という言葉は、このような評論のスタイルのことを指していると考えてよい。ここでもビュトールはやはり音楽のことを考えているのであって、周到に準備されたコンサートよりも、即興演奏の方が、より音楽の深いところに到達することもあるということである。

こうして、批評家ビュトールの眼が、さまざまなバルザックの作品に触れることで、数々の言

業による「即興演奏」が生み出されていくのだが、その第一巻『商人と天才』は、社会の諸現象の「原因」を追究するという『哲学研究』の分析から、『人間喜劇』全体を照射しようという試みである。作者によれば、これらの「研究」はとりわけ社会の病理の原因に関わるものである。

同時代の社会を描くことにより、バルザックはフランス人の若者がそれについて抱いている像をそれまでとは違ったものにしようとする。彼は社会における病気の蔓延を暴いて見せるのだ。『哲学研究』において、彼はそこからさらに遠くに行こうとする。そして非常に強烈な喩えを提示して、病気の原因を明らかにし、理解させようとするのである。(I, p.16)

ここでビュトールは、『哲学研究』を構成する諸作品について、最初の『あら皮』から、この作品群の頂点でもあり、全体を締めくくる『セラフィタ』に至るまで、一つ一つ丹念に分析を進めている。しかしながら、読解は次第に社会の中における天才の位置、そして芸術家、とりわけ作家の役割に焦点が当てられ、その周辺を巡るような形になる。作者は『哲学研究』の至る所で、そのような天才の境遇や芸術家の使命などが、比喩の形で描かれているのを見出すのである。社会の病気の原因を突き止めるという『哲学研究』の目的は、これらの側面と実は矛盾するものではない。というのも、バルザックが考える同時代の病理の最も大きな徴候の一つとは、凡庸な精神の支配するブルジョワ社会において、天才が正当に評価されずに、反社会的で危険な存在となってしまうことだからである。

大衆に理解されず、危険な存在と見なされて孤立に追い込まれた天才たちは、失われた意思伝達の道を回復するために、何らかの形で身売りを行わざるを得なくなる。のちにボードレールによって深められることになる売春のテーマは、バルザックにあってもすでに大きな位置を占めているのである。この同じ主題は別の箇所では悪魔との契約とも呼ばれ、またビュトール自身によってサルトルのアンガージュマンの概念にも比せられているが、こうした芸術家の運命を描いた作品として、『知られざる傑作』を分析していくビュトールの切り口は、他のどの評論文よりも鮮やかだ。この短篇では、至上の女性画を追求するあまり、自らの作品を破壊するにいたる画家フレノフェールにばかり注意が集中しがちだが、ここではフレノフェール、ボルビュス、プッサンという三人の画家と、彼らを巡る絵画の、あるいは現実の三人の女性を位置づけることによって、芸術家とその売春行為の意味合いが明らかにされていく。

しかし作者はそれにとどまらず、作家バルザックの境遇をもそこに重ねて見出している。この作品で、自らの恋人をモデルとして引き渡すことによって偉大な古典派の画家になったプッサンのように、バルザック自身も病んでいる同時代の社会に身を投じようとしている、とビュトールは考えるのだ。「バルザックの芸術とは、彼が夢見るような理想の芸術ではない。それは相当深くまで同時代の社会に身売りした芸術なのである。悪魔との契約とはバルザックが彼の時代と結んだそれであり、この契約によってある程度まで時代に認められ、その結果、時代に働きかけることが可能になる」(I, p.114) こうして同時代の社会を描くことを選択したバルザックが、現実

を作品の中に再現するという行為そのものによって、現実を変革しようとしている、それがバルザックにおけるレアリスムの本質だとする『離別（アデュー）』論も、この巻の頂点の一つをなす。

バルザックが七月王政以降のフランス社会に対して感じている危機意識、そして『人間喜劇』を書くことによってその社会を変革しようという企図については、ビュトールは第二巻の『大天使の見たパリ』の中でも繰り返し強調している。そしてこのテーマがパリを舞台にした諸作品の中でさまざまな様相を示すのを丁寧に分析していくのである。この時代のフランスの危機を観察するときに、パリは当然その中心に来る。

パリはバルザックの描く現実の核心にある。それは残りの全てが拠りかかっている難破船を救うために、行動を起こすことのできる、そして行動しなければならない、そういう場所なのである。しかし同時にパリは欠かすことのできない光学器械でもあって、作家はそれを通して残りの部分を観察し、探索に出かけては猛り狂う仕事場に戻っていくのである。(II, pp.17-18)

旧体制下のフランスにおいては、人物と彼を取り囲む装飾品の間には調和が見られた。革命後の社会では、その調和が失われ、それらの物は意味の失われた言葉のようになってしまう。芸術家も貴族社会にあってはその才能を認められて庇護を受けていたが、十九世紀のブルジョワ社会において、天才たちは疎外され、次第に反社会的な存在となっていくのである。バルザックの作品において、ヴォートランや十三人組を初めとする裏の社会で暗躍する人物たちが多く描かれるのは、その理由による。「秘密結社が可能になるのは、ただ表の社会の欠陥を利用することによってであって、闇に隠れてはいるものの、秘密結社はそれゆえ来るべきよりよい社会のモデルともなりうるのである」(II, p.63)。『人間喜劇』を書く、そしてそれを読むという行為は本来そのような理想社会の実現をめざすものであった。しかし後期のバルザックはより悲観的になり、「治療法をもたすことができると自負することもなく、病気の証言をより正確なものにするために努力を注ぐようになる」(II, p.288) という。

革命の後、物だけではなく人も本来いるべき場所にいないという現象を生じることになったが、そのことはとりわけ女性について当てはまる。第三巻の『女性生活情景』は、バルザックの作品におけるそのような女性の諸相を取り上げたものだ。十九世紀、特にルイ＝フィリップの時代はそれまで存在しなかった多くの人物のタイプを生み出したが、それらの男性と同じ家庭に暮らすことになる女性はさらに多様になる。このような社会においては、女性たちが自らにふさわしい男性と出会うことなく、不幸な結婚生活を強いられることも多くなるのである。これは一見して悲劇的な状況だが、作家バルザックもそれを嘆かわしく感じているだろうか。ビュトールはそうは考えない。彼は『人間喜劇』を『千一の女たちの物語』とも呼べるとし、次のように述べているのである。「バルザックは昔の女たちを賞賛するが、同時に彼の時代に新しく創り出される女性の多様性にも目を奪われている。彼はこれらの女性たちを詳細に描いて飽くことがない」(III, p.18)。

ついで、バルザックの作品に登場するさまざまな女性のタイプが取り上げられていくが、ビュトールは彼女たちの特徴と当時の社会状況との関連をつねに明らかにしながら進んでいく。『人間喜劇』の冒頭におかれた短篇『鞠打つ猫の店』を扱った章で、舞台となる家庭の二人の姉妹の全く異なる境遇の間に、種の維持をめざす旧体制の思想と、そこに変化を持ち込もうとする革命的思想との断層を見出そうとする試みは穿ったものだ。このあと社交界の女性たち、娼婦たち、女性作家たちなどが取り上げられていくが、これらは各論になるので詳しい内容に立ち入ることはしない。ただ評者としては、最後の方に置かれた『村の司祭』についての一節に、個人的に惹かれるものがあったことを言っておこう。ここで作者は、不幸な結婚から姦通によって愛を知り、ついでその贖罪に生きるようになる主人公ヴェロニックの変容を、その身体的特徴の変化を通して丹念にたどっている。この春の講演会において、大江健三郎氏も同じ作品を取り上げて、ヒロインの青色と茶色の間で揺れ動く眼の色の変化を、細かく拾っていたのが記憶に新しいが、作家として非常に近いところに目を向けているのが興味深い。

三巻の全体を通して、ビュトールがバルザックの作品の随所に作家の比喩、書く行為の比喩を見出していることを最後に指摘しておこう。また彼は作品の批評を行いながら、しばしばそれを書いているバルザックの位置に注意を喚起している。これまで挙げてきたもの以外に、新たに例を出すことはしないが、これはビュトールのバルザック論に、バルザックにとって書くという行為がどのような意味を持っているのかという問題意識が一貫し存在していることを示すものだろう。またそれは同時に、現在も作品を生産しつづけているビュトールにとって、書くという行為は何を意味するかという問いかけでもある。このバルザック論が、意外な新しさを感じさせるゆえんである。

もし全ての書物があら皮であるのなら、ビュトールのこのバルザック論もそうに違いない。問題は、バルザックを読むのに使うべき時間の一部を削ってまで、この三冊を読むのに多大な時間を費やすだけの価値があるのかということだが、これからじっくりとバルザックの作品群に入っていこうとしている大胆な読者にとっては、そういう寄り道も無意味ではないと言っておこう。読者は、自らの興味の導くところから目を通していけばいい。とりあえず三巻のうちどれかと言われるなら、第一巻をおすすめする。